

民間研究所で単位取得

教育プログラム 東大が大学院生向け

民間企業の研究所に通学し、単位取得も。東大は1日、大学院の学生が企業で授業を受ける新しい教育プログラムをスタートした。学生が企業を見学する形はこれまでもあったが、大学が正規の講義を企業で受けられるようにしたのは初めての試みだという。プログラムの指揮を執る東京大学の高橋琢二准

教授は「大学と企業との垣根を取り払い、また専攻の枠も越えた広い視野を持つ学生を育てたい」と話す。事業化を意識した企業の研究開発体制を实地で学ばせることで学生の研究意欲を高く、一方、企業側には優秀な人材を前に自社をアピールする好機にもなる。

初回授業の舞台となったのが富士通の厚木研究所（神奈川県厚木市）。東大の客員教授を務める富士通研究所の横山直樹フェローは「例えば富士通では5円の研究開発費を確保するために売上高100円を稼ぐ必要がある」といった企業ならではの経営感覚を講じた。また、富士通研究所の主任研究員らが「量子暗

号通信」「カーボンナノチューブ」などの先端技術を市場の動向を交えながら講義。約30人の学生が熱心に耳を傾けた。参加した学生は「製品化を念頭に置いた企業の研究姿勢は新鮮だった」と学内の研究とは異なる知見を得られたようだ。

講義名は「ナノ量子情報エレクトロニクス先端学際工学特論」。東大のナノ量子情報エレクトロニクス研究機構（機構長＝荒川泰彦東大教授）が俯瞰的な視野を持てる人材の育成を目的に開講した。平常の学内講義では北海道大学や京都大学、慶応義塾大学など他大学から毎回異なる講師を招くなど教授陣も華やか。今回はNECの筑波研究所（茨城県つくば市）、3回目は日立製作所の基礎研究所（埼玉県鳩山町）で講義を行う予定。

「いずれは休暇などを利用した数日間の集中講義なども計画したい」（高橋准教授）という。



富士通の研究者の説明に聞き入る学生